世事百談＝山崎美成
閑田耕筆＝伴蒿蹊
閑田次筆＝伴蒿蹊
天神祭十二時＝山含亭意雅栗三

18

# 日本随筆大成

第一期

吉川弘文館

日本随筆大成　第一期　第九巻
昭和二年十二月廿五日発行
編纂者　日本随筆大成編輯部
代表　早川純三郎
発行者　吉川半七
発行所　日本随筆大成刊行会

日本随筆大成
〈第一期〉18

昭和五十一年三月十五日　印刷
昭和五十一年四月　一日　発行

編　者　日本随筆大成編輯部
発行者　吉川圭三
発行所　株式会社　吉川弘文館
〒113　東京都文京区本郷七丁目二番八号
電話東京八一三―九一五一〈代表〉
振替口座東京〇―二四四番

製　作＝株式会社　たんちょう社

# 解　題

本巻には、世事百談、閑田耕筆、閑田次筆、天神祭十二時の四種を収める。

## 世事百談　四巻

山崎美成（やまざきよしなり）著

本書が同じ著者の「三養雑記」（本大成二期六巻）の続編である事は、著者自ら本書巻頭に記している。好学博覧の著者が手控から原稿百条を取り、今見やすからんため百三十八条に改めたと云う。即ち目録を一覧すればわかるように、「清家の訓点」から「苦学」に至る読書見聞談を集めたもので、其の内容は多方面にわたっている。今具体的に一例を引けば、巻之一「俗語」の中で、「女子のおとなしからぬを、はすはといへるは、蓮葉女より出たる諺なり」として、例証を挙げ、最後に「この一条は山東京伝が考のよしにして、或人のもとよりしるしおこせたるなり」と正直に記している。此れは見聞の聞の方であろうか。浅草寺神事舞の方は、神官田村氏にて、文政甲申の年谷文二、西原梭江とともに舞の稽古を見たとあるから、此れは正に見の方であろう。もともと随筆家であり、編輯の才にも長けている人の著書であり、一応見て面白く見聞を増す事であるが、やはり時節引用される京伝、種彦などの作品と比較すると、一段品位の落ちるのは止むを得ぬところである。しかし其の博識と読者の意を忖度して、一書を成す才能は認めねばなるまい。本書には喜多村筠庭摹写とある挿画もあり、本文の足らざるところを補っている。天保十三年金杉の閑居に稿を了え、天保十四年刊行されている。刊本は古書を蔵している図書館等にて見る事が出来るが、活字本としては『百家説林正編』下

巻、旧大成一期九巻等によって一般に流布している。

本書再刊に当っては、内閣文庫蔵天保十四年刊本によって校合を行った。

山崎美成については、本大成二期二巻「提醒紀談」の解題の条に略記したから、同書を見られたい。

## 閑田耕筆　四巻

伴蒿蹊（ばんこうけい）著

著者は巻の序文に、としごろ人のかたれること、おのが見もし思いも得たることのくさぐさを、反古の裏などに書付たものを、捨てるも惜し書つめ見せよと人のすすめのままに、さらばと五雑組にならって、天地、人、物、事とわけて、見出るままに書きつけたと記している。享和元年の刊行である。蒿蹊は早くより学事に志し、趣味をも解し、能文の士であったから、本書は内容も豊かに、更に品のある読み易い作品となって、世の賞讃するところとなった。「在根良」と云う詞の解について、「凡発語は唯しらぬことにてさし置べしと、京極黄門の説なるを、契沖は肯（うけが）はれず、其義を考へらる。是につぎて、荷田春満、加茂真淵、近歳建綾足も著書有（り）。されどしられぬこと多し。予は強解を欲（り）せず」と其の国学者の自己の基盤を示しているのなど、大いに注意すべき事ではあるまいか、契沖は尊重しており、自ら『吐懐篇補注』を著しているように本書にも古い地名の考証も見え、其の友人関係も時節見えて、著者其の人を考えるにもよき資料となる。説話あり、考証あり、然も著者の学識見聞をさらさらと読み得るのは地下四天王と称せられた人の中でも殊に文を以て称せられた人の作品、さすがである。もう一つ小文を引用、老境の著者の淡々たる心情に触れて擱筆したい。

予ひそかに四少三安の養生を思へり。四少は少（く）二飲食一、少（く）二交遊一、少二言語一、少二思慮一也。三安は

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

安レ分、安レ心、安二死生一也。しかも四少猶守りがたし。況や三安は賢者も病ル所歟。何ぞよくやすんぜん。唯年老て世間に希望（ケモウ）の事なきのみ、自然の養生となる。是は餓鬼の断食といふものかも。

本書の挿絵は、大和絵の大家田中訥言の筆が亦品位をそえている。

最後に寛政十一年霜月の養子資規の跋がある。もう一つ書き落したが、「閑田耕筆」の書名は、巻頭自序の次に六如上人の詩「老来幾部著書成、祇道屏居遂懶情、最是紙田間不得、長遣筆来四時耕」に拠る事を著者自ら記している。閑田廬の図は「続法のえ伴蒿蹊翁詠」の巻頭に、雪堂敬阿の筆になる二面にわたる絵に其面影を残しており、

あらざらんわが世の後の秋までもおもひおかるゝやどの月かげ

老ぬれと花みるほとのこゝろこそむかしの春にかはらさりけれ

の二詠が見られる。此の「続法のえ」は、文化三年五月十一日なっている。耕筆の刊本も諸方の古書を蔵する図書館で見られると思うが、活字本としては『日本随筆全集』六巻、『百家説林続編』下巻及び旧大成一期九巻に収められて流布している。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵享和元年刊本に拠って校合を行った。

## 閑田次筆　四巻　　伴蒿蹊著

本書は閑田耕筆の続編で、前書と共に近世期に於る好随筆なりと云うのが定評である。巻頭の男資規の文化元年の序文によると、翁（蒿蹊）は、わかきより胸ふたがれる病があるからと云う事で、六十代位まで海山に遊んで旅行を好んだが、晩年は閑田廬にこもって書留の反古など見て、老の心遣りとしていたのを書肆の需めに応じて閑田耕筆が成った。なお書肆の勧むるままに、翁の意は知らず、

耕筆に次ぐ書として、閑田次筆を書肆に与えたとしている。編輯校正など一切資規が引受けたのであろう。先ず第一巻に特記すべき其の後の記事を注記しよう。○江戸の人云々とあって、出羽への道の記に「雪の古道」と名付けた一文を作者不明として挙げてあるは、其後の研究で津村淙庵の文章で、著者自筆本「片玉集」十四巻が宮内庁書陵部にあり、其の中の一文であったことがわかった。詳しくは淙庵の研究家石田直太郎稿の「図書寮所蔵本片玉集について」（「書誌学」第七十号）を見られたい。淙庵は佐竹家御用達であるが、国学者としては冷泉為村、成島鳴鳳等の門人で、文化三年五月十六日歿している。浅草東本願寺に葬られた、年七十一。此の度は巻之一紀実、巻之二巻之三考古、巻之四雑話となっている。巻之三までは大体耕筆の調子であるが、巻之四の雑話が少々色合がちがっているようである。ここには『畸人伝』に入るべきような資料、及び自らも云っているように、怪奇の話も往々見られる。二三小文を引用してみよう。

○あるものまどしくて、母の親の養ひがたきにつき、盗みをして捉へられし時、其母悲しびてよめる、

てらしませ神と君とのめぐみにて親ゆゑ闇にまよふわが子を

此歌官に聞えて、死罪を免かれ追放たれしとかや。近き年ごろのことゝ、かたる人ありき。

○塘雨云、江戸の御瓜畠に、狐来りて瓜をとり喰ひければ、吏大きに迷惑し、吉川惟足に祈りてたまはれとたのみしに、惟足夫ほどの事にも及ばじとて、何やらん書付て与へられしを、其畠に建置しかば、其夜よりとらざりし。是は「おのが名の作りを食ふ狐かな」といふ発句なりしとぞ。

などと云うのもある。其の他、四条油小路の観物に今の腹話術のような話があり、この条には畸人伝

の金蘭斎（コンノランサイ）や歌人の馬杉亨安の名も出て来る。詳しくは本文を読まれたし。

本書の跋文を草しておられる金子義篤こと風竹軒は、尚歯会及び禅刹にて友となった人と云う。古器物書画愛好家で、本書中にも蒿蹊は古鈴に就いて長歌を寄せている。

本書は活字本としては『百家説林続編』下一、『日本随筆全集』巻七、旧大成一期九巻に収められて流布している。本書再刊に当っては、内閣文庫蔵文化三年刊本を以て校合を行った。

伴蒿蹊　名は資芳（すけよし）、享保十八年十月朔日、京都三条通り高倉西入るに住す。伴弥兵衛資武（すけたけ）の長男として生れた。幼名を富二郎といった。八歳の時彼の家の本家に当る八幡の伴庄右衛門資之（すけゆき）（一名資章）の養子となり、同家の嗣子の名の彦重郎と改名した。資之は庄右衛門家の第三世で、其の家は畳表、蚊帳、傘などを商う富商であった。寛延三年十月、十八年の時養父歿し、蒿蹊は庄右衛門家の第四世を襲った。彼は伴源太郎（第二世）の女秀を娶ったが二十歳の時妻は歿し、以後妻を迎えることなく、妾暉（てる）を置いた。明和元年九月、三十一歳の時、隣家の分家である伴伝兵衛（第五世）資倍（すけます）の次女いしを養女とし、これに縁者の和泉、堺の森与治兵衛の長男を迎えて配した。庄右衛門第五世の資要（すけかね）である。なお前記の伴源太郎家はこの伝兵衛家の分家に当る。

蒿蹊は商家の主人としては、時には江戸日本橋の出店に出向いたり、大坂の淡路町二丁目に新しく支店を開くなど、家業に大いに力を尽したのであるが、明和五年三月、三十六歳の時資要（すけかね）に家督をゆずって、京都で薙髪、蒿蹊と号した。これから其の文学活動は心置きなく初ることである。薙髪後洛東岡崎に卜居、また洛南にも移居、ここに『近世畸人伝』の編述が成され、寛政二年に刊行せられるが、稿の成ったのは天明八年五十六歳の頃であった。寛政七年六十三歳の時に洛東蓮華王院（三十三間堂）附近に家を造り、のち半町ばかり南にこれを移したのが閑田廬であった。『続近世畸人伝』の

方はここで成った。蒿蹊は、この家に歿するのである。少々略伝も長すぎたが、今まで其の文名が有名でありながら、いっこう八幡の豪家の出であるとばかりで、その消息がわからなかった。然しその事実を調査発表せられたのは『近世畸人伝・続近世畸人伝』(東洋文庫202)の編者宗政五十緒氏である。以上は殆んど同氏の研究によるものであるが、蒿蹊の研究は先ずここから初まらねばならぬので煩を厭わず抄写した事である。同じ四天王の一人である小沢蘆庵の方は、故中野稽雪翁の如き熱心な研究家があって、其の門人友交関係までに研究が進んで居るのに、蒿蹊の方は淋しい限りである。今手許にあるもの二三を加えてこの稿を終りたいと思う。

内閣文庫に中山業智(菅沼斐雄門人)の『真際随筆』と云う写本がある。本書には『近世畸人伝』からの抄出が多いが、その第五巻に、

一閑田子伴蒿蹊は近江八幡の人、其家富豪なれども家業を嗣事を辞して、京都に出和歌を以鳴。明和の頃よりして其名益す〳〵著はる。文化中に年七十余にて歿。地下四天王と唱へられし一人なり。四天王は蘆庵澄月大愚蒿蹊の四人也。著す所書近世畸人伝前後十巻、閑田耕筆同次筆八巻、閑田文章六巻刊行す。蒿蹊の別家某備前の国岡山に在、是も富をなす。備中笠岡の人胡屋小十郎、或時其家を尋ねしに、床に蒿蹊の懐紙を掛けたりしを、小十郎賞せしに、主の云、是は京師伴大人の哥にて本家の息某にはあらざるよしを答ふ。依つて具に其事歴を語りたれば、主驚いて云。本家の男某若き時は殊に放蕩にして斯る風流の事なしつとも思はざりしに、今君が話にて始て知し迚、大いに笑ひぬと。胡屋小十郎の話を思出て、丁未七月十六日記(弘化四年)

胡屋は芥川貞佐、高橋残夢と共に土地の豪農なり。

次に「続法のえ伴蒿蹊翁詠」と云う文政二年頃刊行せられたと思われる刊本に、義諦と云う人の蒿蹊

伝（文化八年正月）がある。此れには晩年蒿蹊が仏教に心を傾け法雨律師について浄土の御法をみがき、安心を決定したとある。晩年の蒿蹊の心境を窺い見るに便利である。晩年の心境を考えるのに、今一つ森銑三氏著『近世人物夜話』に都立中央図書館蔵中島棕隠著「錦西随筆」の記事があるが余り長くなるので抄筆する事にする。今は一般に知られているその号や墓記などを記して、この稿を終る。前記小伝に、「閑田廬蒿蹊　諱は資芳　字は操山。閑田は洛南今野の辺りなる別荘の名、易徳舎（イトクシヤ）は蓮華王院にちかき居になづくべしとて、やむことなき御方よりたうばりし号、」とある。「御国ふりははじめ有賀氏（長伯）にことひ、其人身まかりてより、武者小路実岳卿にしたがふ、」とある。『京都名家墳墓録』によると、

知音院総墓地
閑田廬幽誉蒿蹊操山居士
両側に、姓伴諱資芳　薙髪蒿蹊　閑田子
寿七十四　享保十八癸丑年十月朔
日生　文化三丙寅月七月二十五日歿
伴資規
伴熊尹建

執筆に当りやや整理を欠いたところが多いが、稿を改むる時なく、蕪雑のまま御覧に入れる。御寛恕を乞う次第である。

## 天神祭十二時　一巻

山含亭意雅栗三（さんがんていいがくりぞう）　著

本書については、私はいっこう知るところがない。旧刊大成本の凡例に、「この書は有名なる大阪

天満宮の天神祭の情景を、かの石川雅望の「北里十二時」に倣い、優雅なる和文にて記述したものにて、文化文政頃における祭事の状態観るが如し。挿画は暁鐘成の筆に成る。出版の年月明かならず。奥付に、大阪中橋筋瓦町千里亭扇屋利助とあり。この書刊本なれど、現今希覯書にて、所収本は、天満宮文庫本に拠れり。著者山含亭意雅栗三は狂歌師にして、「田舎あふむ」といふ滑稽本の著あり。その伝を詳にせず、」とある。文運日進月歩の今日でも一度埋没した資料は如何ともならぬものである。叶わぬ時の助け舟と、此の方面に造詣の深い肥田皓三氏に御助力を御願いしたところ、この本、意外に伝本尠なく、大阪府立図書館（この本極美の驚くばかりの綺麗な本）、他は天満宮文庫だけであると云う事である。なお意雅栗三も年来心にかけているが、未だに其の人を詳にしないが、「色深狭睡夢」（葦廼屋高振述）文政九年刊の挿画に意雅栗三の狂歌があり、この本は『日本名著全集』洒落本集に収めてある由の示教を得た。此れは手許にもあるので見ると、七七六ページ、唐紙の絵に「よひことに針もて来ぬる蚊はさりて衣を通す風の涼しさ　意雅栗三」とある。この葦廼屋高振も今や意雅栗三と共に其の人を詳にしない方に入れられている。大阪のこの種の一群の文人が、資料不足のために研究者の眼の至らぬ所にあり。肥田氏も年来注意を怠らないで居られると云う。この色深狭睡夢が文政九年の刊行であるから、天神祭十二時も時代としては文政頃の刊行かと推測するより今は仕方がない。

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

# 目次

世事百談……一
閑田耕筆……一四九
閑田次筆……二九一
天神祭十二時……四五五

（解題　丸山季夫）

山崎羔成大人隨筆

# 世事百談

全四冊

東都書肆 下谷御成道 青雲堂英文藏梓

# 目次

## 巻之一


清家の訓点　九
平仄　九
韻塞　一〇
漢和　一〇
俚諺　一一
俗語　一三
浅草寺観世音菩薩　一五
浅草寺神事舞　一六
廿四孝　七賢人　一八
水滸伝の諢名　一九
西方の聖人　二〇
日を呑と夢て孕　二三
八百屋お七　二三
遊女総角が世代　二三
甲乙人　二五
男子の化粧　二六
華甲重逢　二六
嬰児の手あて　二七
天時占候　二八
梅雨　三〇
大風大水を知ること　三〇
雨足風手　雲海　三三
雪の竿　三三
節序の売物　三三

奉公人出かはり　三六
しきせ　三七
彼岸　三七
八朔白小袖　三七
純子の上下　三八
野寺の鐘　三九
黄金の壺　三九

## 巻之二

物化　四
下野国薬師寺　四三
道成寺　四五
寺を瓦葺といふ　四八
さしもぐさ　四八
京間　田舎間　四九
格天井　四九
片岡山の贈答和歌　四九
蘇迷魯の山の歌　四九
こさ笛　五三
神社の位階　五三
氏神　五四
弥陀の手糸　五四
烏八臼　五五
ほうさい念仏　五六
木魚　六〇
謡抄の勘文　六一
小歌　六三
浄瑠璃の評　六六
腹に子のあるかざみ　六八

節付の名目　六
三味線　六
琉球国の小歌　七一
ゑらぶ鰻　七三

## 巻之三

米穀は国の基　七六
必死を極めし人開運せし話　七七
慶安　女衒　肝煎　八〇
中人　八一
敷島の道　八一
東百官　八二
法華経の巻数　八三
草書心経　八三
いらたかの数珠　平形念珠　二連数珠　八四
氏寺　八五
一樹の蔭に宿るも他生の縁といふ詞　七三
児啼を止る諺　手々甲　七三
方言　七四
古画を証とす　八五
郭巨が黄金釜　八六
源氏物語　八七
田舎詞　俗語　八八
省文　九三
時の鐘　九四
熊胆の功能幷に真贋の弁　九四
鬼魅たるもの〻治療　九五
食せずして飢ざるの法　九八
唐人は浴せずといふ諺　九九

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook